Gore Vidal と歴史小説

佐々木　徹

ゴア・ヴィダルは The American Chronicle あるいは Narratives of Empire と称される作品群、*Julian*、*Creation* といった歴史小説に加えて、純然たる歴史書 *Inventing a Nation* などを著しており、20 世紀のアメリカの作家の中でも、目だって、歴史を強く意識した 1 人だったと言える（発表ではいくつかのパッセージを取り上げ、*Burr* が緻密に構成された小説であることを具体的に例証した）。ハロルド・ブルームは、優れた小説家ヴィダルがキャノンに入らないのは彼が「今や決定的に値打ちが下がってしまった」歴史小説の書き手だからだ、と述べている。歴史小説というジャンルに関するこの見方は、イギリスでは 1880 年代のスティヴンソンを最後のピークとして歴史小説は下り坂になり、1910-20 年代には B 級ジャンルに堕した、とするジョン・サザランドも共有するものである。では、わが国の事情はどうなのか？

日本では、美妙、紅葉らの萌芽期（1880 年代）を経て、ちょうど英米における歴史小説が衰退期に入る頃（1910 年代）から、鴎外が先頭に立って、本格的な歴史小説（もっぱら短編小説）が次々に出てくる。そして、1920 年代の後半になると、中里介山をはじめ、白井喬二、大仏次郎、直木三十五などがいわゆる大衆的な、しかし、非常に優れた長編小説を生み出す。その流れを受けて、1933 年に、谷崎潤一郎が評論「直木君の歴史小説について」を発表する。ここで彼は、シェンキェヴィッチの『クオ・ヴァディス』（1896）のような歴史小説が自らの理想であり、小説は通俗的で物語性が豊かなものが本道である、と言う。これぞ、まさしく、わが意を得た発言である。ヴィダルの *Julian* と同じ人物を主人公にした辻邦生の『背教者ユリアヌス』に対して、「『クオ・ヴァディス』のような通俗歴史小説にすぎない」という批判がなされるのだが、僕に言わせれば、そうではなくて、まだ通俗性が足らないのである。辻邦生のような、頭のいい、文章がうまい人の小説に、大谷崎言うところの「結構あり布局ありのおもしろさ」がもっとたくさんあればいいのにそれがない――そこが、日本の歴史小説にとっての不幸なのだ。